

あどがきにかえて

蓮如伝説を、会員の手で探る話がちあがった時は、内心少し心配であった。「門徒もの知らず」という諺がある。諺の内容は、真宗地域では、民俗行事や民間信仰が真宗によって抑圧されているとの意味であろうか。この諺をうけて、「真宗地域は民俗学の対象としては、やりにくい」という固定観もあったから、蓮如伝説も「門徒もの知らず」の雰囲気にも、打ち消されているのではないかとの懸念である。心配をよそに、実際には会員から多くの伝説が寄せられた。会員の日常における調査研究が、地域に根ざして地道に活動されてきた賜物として、お礼申しあげたい。特に福井民俗の会の杉原丈夫氏、富山民俗の会の伊藤曙覧氏には、多くの伝説を投稿いただいた。

冊子中の蓮如のよび方に関して、会員より伝承者の希望もあって、ぜひ「蓮如さま」「蓮如上人」としてほしい旨の申し出が多くあった。ここでは

編集委員一同の協議の結果、僭越であったが、「蓮如さん」として統一させていただいた。「蓮如さん」という言葉の響きは、誰しも畏敬感より親近感を幾分強く感じられることと思う。「蓮如さん」のよび名は、編集委員一同、北陸の門徒の蓮如観には、最もふさわしいと考えたからであり、一人よがりでもないと思うのでお許しを願いたい。

本文中の伝承所在地を示す地名表示については、「字」名は省略した。

かつて金沢には、蓮如忌当日、近郊の向山（卯辰山）に職人、市民等が登って、酒食の宴を開く習俗があった。私は、民俗学以外の研究者より、民俗学者はこの行事を「レンギョサン」と命名して紹介しているが、これは「レンニョサン」の間違いでないかと、度々質問を受けてきた。向山西麓の旧小川町一帯の現地調査では、圧倒的に「レンギョサン」が多かったが、今村健一氏（現西念町、昭和四年生）からの御教示は、この問題の解答のように思う。今村氏の話の内容は、『二十才になったので頼母子に入られてもらった。月一回の会合では、仏法の話も時には出た。仏法にくわしい年寄りが、「向山で酒を飲むのをレンギョサンと言うが、蓮如さんの日にするからレンニョサンと言うのが正しい」と言うと、他の年寄りが「あんたはレンニョサンと言っているつもりかも知れんが、わしにはレンギョサ

ンと聞こえる」と返したので、頼母子の場が大笑いとなった」というものである。この今村氏の話に因んで私の体験談をつけくわえておく。私は先日、第十三回北陸三県民俗の会年会で、「蓮如伝承」のシンポジウムの司会役を担当した。パネラー六人の発表中、「レンギョ」と聞こえる人が三人もいたのには驚いた。パネラーは、無意識の中に「レンギョ」と発音しているのであり、石川と福井の方であった。北陸の門徒衆は、日常語では蓮如を「レンギョ」と、今も無意識で変化させて使っているのである。「レンギョ」という言葉に、特別の意味を求めて理論構成をされる人もあるので、この際、この問題について付言しておく。

蓮如伝承を集成して、単行本を刊行しようとする事業は、加能民俗の会としては最初の試みであり、幾つかの障害やむづかしさを伴うことが予想されたが、会長小倉学、副会長今村充夫両先生には、未熟な編集者一同に對して、陰に陽に、豊富な学識体験をもとに、多大の助言をしていただき、漸く発刊にこぎつけることができた。

また、本企画に賛同を示された橋本確文堂社長橋本勝郎氏には出版を引受けていただき、さらに実務的な写真資料、寺院一覧の整理等を、短期間に精力的に遂行された十月社の中田徹・勝井隆則両氏の外、多くの方々の

御援助を受けた。皆様のお陰で、ここに当会として最初の単行本を上梓でき、きる運びとなり、喜びひとしおである。関係各位に対し厚くお礼を申し上げる次第である。

(橘記)